

東京オリンピック 2020 柔道競技を振り返って

平岡拓晃¹⁾

Reflecting on Judo at the Tokyo 2020 Olympic Games

Hiroaki HIRAOKA¹⁾

2019年12月に報告された新型コロナウイルス感染症(Covid-19)は世界中に急速に感染拡大し、2020年3月には東京オリンピック・パラリンピック大会の延期が決定された。史上初の延期決定となり、その影響はスポーツ界だけでなく、これまで当たり前だった日常生活すら制限がかかる未曾有の状況になった。新型コロナウイルス禍で開催可否に揺れた東京大会だが、大会組織委員会やボランティア、医療従事者など多くの方のご尽力もあり、感染対策として来日後の隔離期間や自由行動自粛、毎日のPCR検査実施など細かいルールを設けて、2021年夏に東京オリンピック・パラリンピック大会が開催された。東京都が緊急事態宣言下のため無観客での実施となったが、世界から206の国・地域11,417名の選手が参加した¹⁾。全競技を通じ、日本は金メダル27個、銀メダル14個、銅メダル17個の計58個を獲得。過去最多だった、2016年リオデジャネイロ大会の41個を大きく上回る記録となった。

柔道競技は、7月24日から31日までの8日間、東京都千代田区の日本武道館において開催され、世界から128ヶ国、393名(男子201名・女子192名)の選手が参加した。日本の男子では、60kg級の高藤直寿選手の金メダル獲得か

ら始まり、全7階級のうち金メダル5個を獲得。女子では、48kg級の渡名喜風南選手の銀メダルから始まり、金メダル4個、銀メダル1個、銅メダル1個を獲得。そして、今大会から正式種目となった男女混合団体戦での銀メダルを含む、合計9個の金メダル、2個の銀メダル、1個の銅メダルを獲得した。今大会、私は柔道競技を解説者として日本武道館で直に見て感じたことは、戦った日本選手達の「我慢」の姿だった。簡単ではあるが、日本柔道史上最多の金メダル9個獲得を含む全ての日程を振り返ってみたい。

◎大会1日目

大会初日に出場した男子60kg級の高藤選手(パーク24所属)は、3回戦から優勝候補の1人のチフミビアニ選手(ジョージア)と、準決勝はリオデジャネイロ大会銀メダルのスメトフ選手(カザフスタン)と対戦する厳しい組み合わせだったが、自分の攻撃したい気持ちを上手にコントロールし慎重に戦い、時には大胆にリスクをおかしながら攻める姿には、5年前のリオデジャネイロ大会銅メダルの時より成長した姿があった。決勝戦では、近年成長著しい若手有望株のヤン選手(台湾)との対戦。勝ち上

1) 筑波大学体育系

Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba



写真1 柔道競技会場

がるために消費したスタミナを考慮した巧みな組手捌きで試合状況を支配し、相手にやりたい柔道をさせない圧巻の試合で見事に優勝を決めた。

また、女子48kg級に出場した渡名喜選手（パーク24所属）は、初戦からの動きも良く、オリンピック初出場の気合は感じられない戦いぶり。準決勝では、世界大会の決勝で2度敗れているピロディド選手（ウクライナ）と対戦。これまで試していなかった左手から先に持ち、相手の状態を固定する作戦を実施。時間が経つにつれ、ピロディド選手の体力が削られ、徐々に渡名喜選手のリズムになる。延長戦に入り、組手と足技でプレッシャーをかけたところを得意の寝技で仕留め、オリンピックの舞台でリベンジを見事に決めた。決勝戦のクラスニキ選手（コソボ）との戦いでは、試合展開を優位に進

めていたのは渡名喜選手だった。しかし一瞬の間をつかれ、内股で投げられてしまい銀メダルに。試合後のインタビューでは悔しい気持ちを口にしていたが、渡名喜選手の持ち味である強気な姿勢が前面に出た1日であった。

◎大会2日目

この日は、オリンピック大会で歴史的な1日となった。兄妹による同日金メダル獲得である。世界選手権2連覇を獲得している兄・阿部一二三選手（パーク24所属）と妹・阿部詩選手（日本体育大学所属）の2人は、日本柔道界だけでなく世界の柔道の顔として今大会を迎えた。男子66kg級の一二三選手は、全試合を通して全く危なげなく勝ち上がり優勝した。優勝候補1番手の実力を兼ね備えていたが、それ以上に負けられない想いがあった筈。それは、最

大のライバルである丸山城士郎選手（ミキハウス所属）との代表決定戦で勝利したこと。最強の選手と最高の試合をした経験は、一二三選手自身を大きく成長させた。他の階級の選手が、オリンピック代表の内定をもらう中、唯一決まっていなかったのが一二三選手の階級である。最終選考会を兼ねた代表決定戦が行われる前に、新型コロナウイルス感染拡大により中止。その間、日本体育大学を卒業し、パーク24に入社。環境が変わりながら状況は変わらない、そんな葛藤のある中で丸山選手との一騎討ちによる代表決定戦が行われた。この大一番に勝利した一二三選手は、「この戦い（一騎討ち）より崇高な舞台はないだろう」と思ったのかもしれない。オリンピックでは、初めての舞台と思えないくらい落ち着いた戦いぶりだった。豪快な投げ技が持ち味な一二三選手は、常に周りから研究されてきた中で相手に背負投を意識させることにより、相手の重心が後ろに移動するところに大外刈を仕掛ける、駆け引き面での成長ぶりも見えてとれた。危なげなく優勝を決めた後の立ち振る舞いは、その先を見据えている様子も窺えた。

そして、兄より先に優勝を決めたのが、女子52kg級の妹・詩選手。初戦では、技の確認をするかのように強引に攻めていたが、準決勝からは1段階ギアを上げ、危なげない勝ち上がりで決勝までコマを進める。相手は、難敵のブシャール選手（フランス）。過去の対戦で一度不覚を取り敗れはしたが、その後は勝ち越している相手。持ち前の運動神経の良さと計算された理論から技を放ってくる相手に対して辛抱強く応戦し、最後は寝技で仕留める。詩選手が、立技以外に武器の一つ増やすために取り組んだのが、この寝技だった。世界ナンバーワンの実力者でありながら、進化を止めない姿勢を貫いた詩選手の勝負師としての隙の無さを、多くの方々が感じたことと思う。

◎大会3日目

男子73kg級では、リオデジャネイロ大会金メダルの大野将平選手（旭化成所属）が、大会連覇をかけて登場。主要大会に出場するのは約1年5ヶ月ぶりだが、終始落ち着いた表情で自信に満ち溢れた雰囲気を感じられた。得意技である内股と鍛え抜かれた肉体を武器に順当に勝ち上がり、準決勝ではツェンドオチル選手（モンゴル）と対戦。モンゴルの柔道選手は、モンゴル相撲をベースにした試合運びをすることが多いが、ツェンドオチル選手は珍しく柔軟さを持ち合わせた厄介な相手で、大野選手にとっては情報が少ない相手をオリンピックの舞台で迎えてしまった。試合では、大野選手の攻撃力を警戒したツェンドオチル選手は、巧みなヒットアンドアウェイ戦法で大野選手の得意な形をことごとくかわす。しかし、大野選手は、ツェンドオチル選手が指導の罰則を2つ受けて勝負せざるを得ない状況を作り出し、相手が仕掛けてきた場面に応戦し、小外掛で優勢勝ちを決めた。決勝戦では、シャブダツアシビリ選手（ジョージア）と対戦。2012年ロンドンオリンピック大会男子66kg級の金メダリストであり、今回は2階級制覇を狙って出場し、モチベーションも高く、この日のハイパフォーマンスぶりは際立っていた。技の手数を増やし豊富なスタミナで攻め、そのリズムに慣れてきたところに威力のある技を織り込んでくる厄介な相手。試合では、大野選手は自分の仕掛ける状況を作るため、敢えて前進してプレッシャーをかけ続ける。本戦4分間では決着つかず、延長戦に。お互い激しい攻防が続く中、ほんの一瞬、大野選手の得意な組手に。間髪入れず大外刈を仕掛けるも、相手は一回転して腹這いで逃れる。この技の威力が相手の脳裏に刻まれたためか、次に同じ組手になった時、反応がコンマ何秒か遅れた。その瞬間を逃さず、支釣込足で投げて決着した。試合時間9分26秒にも渡る死闘であった。

女子57kg級では、芳田司選手（コマツ所属）が出場。内股の威力が素晴らしく絵になる選手

で、得意の内股をマークされていることを理解して、背負投系統の技を準備していた。体も良く動いており、準備していた一本背負投が決まるシーンもあり、体力も温存出来た状態で順調に準決勝進出。対戦相手は、ジャコワ選手（コソボ）。芳田選手らしい思い切りの良い柔道で自分のリズムに乗ろうとするも、決定打は無く延長戦に突入。延長戦では、一瞬相手の組手により頭の位置が下がってしまった時、相手の小外掛のタイミングが合ってしまい、ポイントを取られて敗退。調子が良い時に落とし穴がある、という勝負の怖さを思い知らされたシーンでもあった。しかし、そこから再び気持ち奮い立たせて挑んだ3位決定戦。先程の負けを引きずることなく、得意の内股を駆使し、最後は一本勝ちで勝利を収めた。トップ選手でも難しい気持ちの切り替えを、オリンピックの舞台で見せてくれた芳田選手のメンタルの強さは、多くの方々にとっても大きな学びとなったと思う。

◎大会4日目

私と同じ大学（筑波大学）の卒業生である永瀬貴規選手（旭化成所属）が、男子81kg級に出場。シード権はないため、初戦から強豪選手との対戦が続いた。しかしシード圏外だった自分の立場を理解し、初戦から集中した戦いぶりで勝ち上がった。決勝戦は、政治的対立によってイランからモンゴルに国籍を変更したモラエイ選手。体の強さとレスリング流の威力ある技が特徴である。永瀬選手は、相手の試合運びを心得ているとばかりに、徹底した組手裁きで相手の良さを消す戦法。本戦4分では決着付かず、延長戦に突入。これまで緻密に組み立ててきた組手と絶妙な技出しにより、徐々に永瀬選手の得意な組手の形に。相手を場外エリアに追い込みながら、完成した自分の組手から得意の足車を放ち、見事に決着。筑波大学男子柔道競技では、前大会の1964年東京大会で、故・猪熊功先生以来の金メダルを獲得した。永瀬選手は、リオデジャネイロ大会で銅メダルを獲得した後

の大怪我を乗り越えてきた経験を糧として今大会に挑んだ。初戦から厳しい組合せで楽な対戦相手は1人もおらず、気持ちを切らさず最後まで我慢を貫き、勝利を収めた永瀬選手の柔道スタイルは、このコロナ禍の状況で我慢を強いられている人達の励みになったことと思う。

女子63kg級は、田代未来選手（コマツ所属）が出場。世界選手権メダリストである田代選手は、優勝候補の1人として畳に上がった。レンシャル選手（イギリス）との1回戦では、丁寧な組手で優位な状況を作り出し、得意の内股で勝利を収める堅実な戦いぶり。しかし、続く2回戦のオズドバブラッヒ選手（ポーランド）との試合では、田代選手が優位に試合を進めるも、お互い技が出ずに硬直状態になってしまう。相手が仕掛けてきた捨て身技を安易に受けてしまい、一本負け。実力的には田代選手有利に思われたが、それを上回る相手の気迫のこもった技に対応が遅れてしまった。一瞬の間、油断があったかは分からないが、勝負の怖さを思い知らされた場面でもあった。田代選手は、2016年リオデジャネイロ大会に出場したがメダル獲得は成らず、今大会にかける意気込みは誰よりも強かったことと思う。オリンピックで負けた気持ちは、負けた本人しか分からない。しかし、今回の負けでこれまで積み上げてきた実績が崩れるわけではない。リオデジャネイロ大会から這い上がってきた経験と、東京大会を目指し努力してきた経験を財産とし、いつか田代選手らしい「答え」を出して欲しいと思う。

◎大会5日目

ここまで男子4階級金メダルという流れの中、男子90kg級に出場したのは向翔一郎選手（ALSOK所属）。激戦区だった国内での代表争いを見事に制して、オリンピックの舞台に登場。90kg級は、世界的にレベルの高い階級である。向選手は、持ち前の自由奔放な柔道スタイルを武器に、2回戦ではヒューイレット選手（モーリシャス）を相手に得意の背負投で勝

利を取めた。3回戦では、腕力の強いトート選手（ハンガリー）と対戦。お互い決め手がない状態が続いたが、向選手が先に技を仕掛けるも、相手の巧みな大内刈により技ありのポイントを取られて敗退。敗者復活戦にも進めず、メダル獲得はならなかった向選手だが、試合直後のインタビューでは大会開催に関わった方への感謝の気持ちを述べた姿は素晴らしかった。目指していた大会で敗れた後、周囲への気くばりはなかなか出来る事ではない。余談だが、インタビュー後に控え室に戻った時には号泣していたとのこと。向選手なりのこの大会にかける思いと日本代表の自覚を待ち合わせた行為であった。

女子70kg級に出場したのは、新井千鶴選手（三井住友海上火災保険所属）。2017、2018年世界柔道選手権チャンピオンであり、徹底してマークされる存在である。高い身長から仕掛けてくるキレのある内股、そして逆方向の大外刈は相手に警戒されているので、丁寧な組手と寝技でペースを握っていった。2回戦と準決勝では延長戦に突入する大接戦だったが、気持ちが折れることなく攻防に応じ、見事に金メダルを勝ち取った。準決勝のタイマゾワ選手（ロシア・オリンピック委員会）との対戦では、得意の内股で相手を投げかけるもポイント獲得にはならず、試合時間16分を超える熱闘を制した。苦しい試合展開が多かったが、選手入場前で控えている時には常に顔を上げており、先を見越しているような佇まいに、新井選手の今大会に懸ける意気込みとオーラを感じた。

◎大会6日目

男子100kg級に出場するのはウルフ・アロン選手（了徳寺大学所属）。2017年世界柔道選手権の金メダリストだが、その後は怪我や減量苦によりなかなか周囲が期待する結果を出せなかった。しかし、自身の柔道スタイルを見直し、体の強さと豊富なスタミナを活かした絶妙な技出しから相手に圧力をかける形に辿り着き、今

大会では危なげなく決勝まで進出した。決勝戦の相手は、チョ選手（韓国）。2019年世界柔道選手権で敗れている相性の悪い相手。しかし、前に出ながら圧力をかける組手を実行し、相手の良さを潰しにかかる。延長戦に入り、ここまで我慢して作り上げてきた戦術によって相手の動きを抑えていき、ある一瞬、ウルフ選手が得意の組手の形になる。間髪入れず得意の大内刈を仕掛けて相手の背中を畳に着け、見事に金メダルを獲得。たった一度の組手を作るために9分もの時間をかけ、そのチャンスをものにしたウルフ選手の緻密な戦術と実行力が光った1日だった。

女子78kg級は、濱田尚里選手（自衛隊体育学校所属）が出場。彼女も、際立った存在感を放った1日だった。得意の形は寝技で、これまでの国際大会でも寝技での勝率が高く、相手は寝技の攻防を極端に嫌がり、反応すればするほど濱田選手が仕掛けたい技のスペースが生まれ、その結果、寝技で仕留められてしまう。この数年間で、濱田選手の寝技は要注意であると周囲に意識させ続けた。決勝戦の相手は、2019年世界柔道選手権で敗れているマロンガ選手（フランス）。難敵中の難敵だけに長期戦が予想されたが、ここでも得意の寝技を活かし、崩上四方固めで危なげなく勝利。今大会では絞技や関節技、抑込技と全ての寝技で勝利し、寝技の重要性と相手に与える恐怖の効果を魅せてくれた日でもあった。

◎大会7日目

男子100kg超級は、リオデジャネイロ大会で銀メダルを獲得した原沢久喜選手（百五銀行所属）が出場。リオデジャネイロ大会の決勝で敗戦したフランス柔道界のレジェンド、ティディー・リネール選手に東京大会でリベンジを、と意気込むも準決勝で敗れ、さらに3位決定戦で対戦したリネール選手にもリベンジ出来ずに敗れてしまった。原沢選手はリオデジャネイロ大会後、オーバートレーニング症候群に陥り、

その後なかなか思うような結果を出すことが出来なかった。その状況を打破するために所属先と練習環境を変え、自ら積極的に行動を起こした。ドン底から這い上がり、再びオリンピック代表権を獲得し、畳の上で戦う姿には頭が下がる思いだった。

女子 78kg 超級は、素根輝選手（パーク 24 所属）が出場した。この階級では小柄な素根選手の生命線は、組手である。自分より大きい相手に対して、巧みな組手で相手を制圧する。相手は組手の圧力に負けて足が止まったところに、素根選手は前方向に投げる体落と後ろ方向に投げる大内刈を状況に応じて仕掛け、試合を優位に支配した。決勝戦のオルティス選手（キューバ）との戦いは、組手と豊富なスタミナで相手を翻弄した。相手は自分の技が通用せず、明らかな疲弊が見え始め、延長戦にも攻め続けて来る素根選手になす術なかった。結局、素根選手は相手の 3 度の指導による反則勝ち。勝つべくして勝った内容だった。しかし、順当に優勝を決めた素根選手も、ここまで順風満帆ではなかった。2019 年 12 月には、柔道競技では誰よりも早くオリンピック代表内定を決めたが、その後に東京大会の延期、所属先の変更や練習もままならない不安定な状況の中、自身のパフォーマンスを最高到達点まで作り上げてきた精神力の強さには目を見張るものがある。柔道競技の日本選手団最年少ながら、堂々の戦いぶりで金メダルに輝く。

◎大会 8 日目

今大会から新種目となった男女混合団体戦。日本は、2017 年から 2021 年（2020 年は開催無し）までの世界柔道選手権では 4 連覇を成し遂げ、圧倒的な優勝候補である。しかし、そんな時こそ落とし穴はある。チームとして国を背負う時のモチベーションが力となり、個人戦では勝っていた相手であっても団体戦では負けてしまう、といった番狂わせが起きやすいのがこの団体戦の特徴である。日本は初戦のドイツ戦

で、女子 57kg 級の先鋒に 52kg 級金メダリストの阿部詩選手を起用した。トップレベルでの 1 階級上の選手との差は厳しいものがあり、阿部詩選手は 57kg 級のストール選手に敗れてしまった。その失点を取り返さんと登場したのは、男子 73kg 級で 2 連覇を達成した大野選手。しかし、普段より強気に攻めた結果、相手の仕掛けた技にタイミングよく合わされてしまい、ポイント失落。残り時間が僅かで取り返すことも出来ず、日本まさかの 0 対 2 に。しかし、その後の女子 70kg 級の 新井選手、男子 90kg の向選手、男子 90kg 超級のウルフ選手、女子 70kg 超級の素根選手が勝利し、日本は逆転勝ち。続く準決勝では、初戦の試合内容を修正してきた日本は、ロシア・オリンピック委員会に 4 対 0 で勝利した。決勝戦の相手はフランス。先鋒は女子 70kg 級金メダリストの新井選手、フランスは 63kg 級で金メダルを獲得したアグベニュー選手。通常、階級が大きい方が筋肉量や重量の多さで有利になり易いが、柔道スタイルの相性が勝敗に大きく影響する場合がある。新井選手にとって、アグベニュー選手はスタイル的に苦手とする相手だった。このことが影響したためか、国を背負い気迫のこもったアグベニュー選手が仕掛けた技にはまって、新井選手は敗退することになった。続く男子 90kg 級の向選手も敗れたが、女子 70kg 超級で素根選手が勝利し、成績を 1 対 2 とする。次に登場した男子 90kg 超級のリネール選手と対戦したのはウルフ選手。全日本選手権大会（無差別）を優勝しているウルフ選手が、あのリネール選手に通用するかと期待をした。しかし、背が高く、腕のリーチが長い規格外の体格であるリネール選手に奮闘もするが、ウルフ選手の柔道スタイルが噛み合わず敗退、1 対 3 となり日本は追い込まれた。こうなると、勢いはフランスチームに大きく流れた。精神的に大きなアドバンテージを受けた女子 57kg 級のシジク選手に対し、日本はこの日初試合の芳田選手。積極的に攻めるも、相手の技を受けてしまいポイントを

奪われ、その後巻き返す事が出来ずに敗れた。大将として待っていた大野選手の出番がないまま、日本チームは敗退となった。個々の高い能力に加え、団結力も伴ったフランスチームは流石だった。決勝で敗れた日本チームも、また素晴らしかった。オリンピック新種目の男女混合団体戦に向けて選手やコーチ、サポートスタッフ達がチーム力向上のため、早い時期からチームビルディングを実施していた。個人色が強い柔道競技だが、誰かのミスは周りがカバーするチームとしての結束力の高さを感じた。ドイツ戦で見せた大野選手には、そのような気概が伺えた場面であった。これまで日本柔道チームは男女で別々の行動をすることが多かったが、男女混合団体戦によって新しい柔道の魅力に触れることが出来た思いがする。決勝戦後に表彰式が行われ、補欠の選手を含む大勢の選手達が試

合会場に上がった。セレモニー後に、選手達は監督やコーチ、サポートスタッフ達と、そして他国の選手達と記念撮影を行っていた。会場には、表彰式で流れていた音楽がいつまでも流れており、これまでの困難を乗り越えて来たことを確かめ合うように、お互いの健闘を讃え合っていた光景が印象的だった。私は選手として2度オリンピックに出場した経験があるが、金メダルが求められる柔道競技でこのような心打たれる場面をオリンピックで見ることが出来たことは一生の思い出となった。

◎柔道競技8日間を振り返り

大会が終了し、日本代表チームの結果は素晴らしいものとなった。全日本柔道連盟のバックアップからなる論理的な強化計画、選手の所属先と代表チームの円滑な連携、科学研究部の情



写真2 男女混合団体戦表彰式

報分析とその活用、徹底したコンディショニング、そして選手達の高い意識、これらが揃ったことで今回の成績に繋がったのだと思う。私自身、2008年北京大会と2012年ロンドン大会に選手として出場し、2016年リオデジャネイロ大会では解説者としてオリンピック柔道競技に関わってきた。この経験から、オリンピックというものは悲壮感を伴うものだと思っていたが、今大会では試合後に選手同士がお互いを讃え合う場面が多くみられ、悲壮感をあまり感じられなかった。おそらく新型コロナウイルス感染症という世界共通の闘いが、言語や文化の違う選手達に団結を生んだのかもしれない。世界中の柔道家たちがコロナ禍で苦しみ、スポーツの価値を問い続けてきた。だからこそ畳の上に立った時、喜びと感謝の気持ちをお互いに共有し合えたのではないだろうか。日本を代表して戦った選手達、支えるコーチやサポートスタッフ、開催するにあたりご尽力頂いた大会組織委員会、医療従事者並びに関係者の方々、大会を支えてくださったボランティアの方々、そして出場した全ての選手と関係者と世界の柔道家たちに、心から感謝とお礼を述べたい。

◎終わりに

東京オリンピック・パラリンピック大会には「全員が自己ベスト」、「多様性と調和」、「未来への継承」という3つの基本コンセプトが掲げられている。全競技を通して、特に「多様性と調和」を実感する場面が多々あった。これまでのような国を背負って戦う悲壮感はあまり感じることなく、競い合いながら讃え合う、改めて「五輪とは何か」を感じた大会だった。数カ国の代表からなる難民選手団が会場、オリンピックの舞台で誇りを持って戦った。今大会では、自身がLGBTであると公表した選手が過去最多となった。スポーツを通して示した「多様性と調和」を社会にも広げ、互いを認め合い、少数者にも寛容な世の中になるようなムーブメントが世界中に広がってほしい。今大会のビジョンである「スポーツには世界と未来を変える力がある」ことを、これからも実践していきたい。

文献リスト

- 1) 東京2020オリンピック競技大会公式,
<https://olympics.com/ja/olympic-games/tokyo-2020>, 2022.1.12.